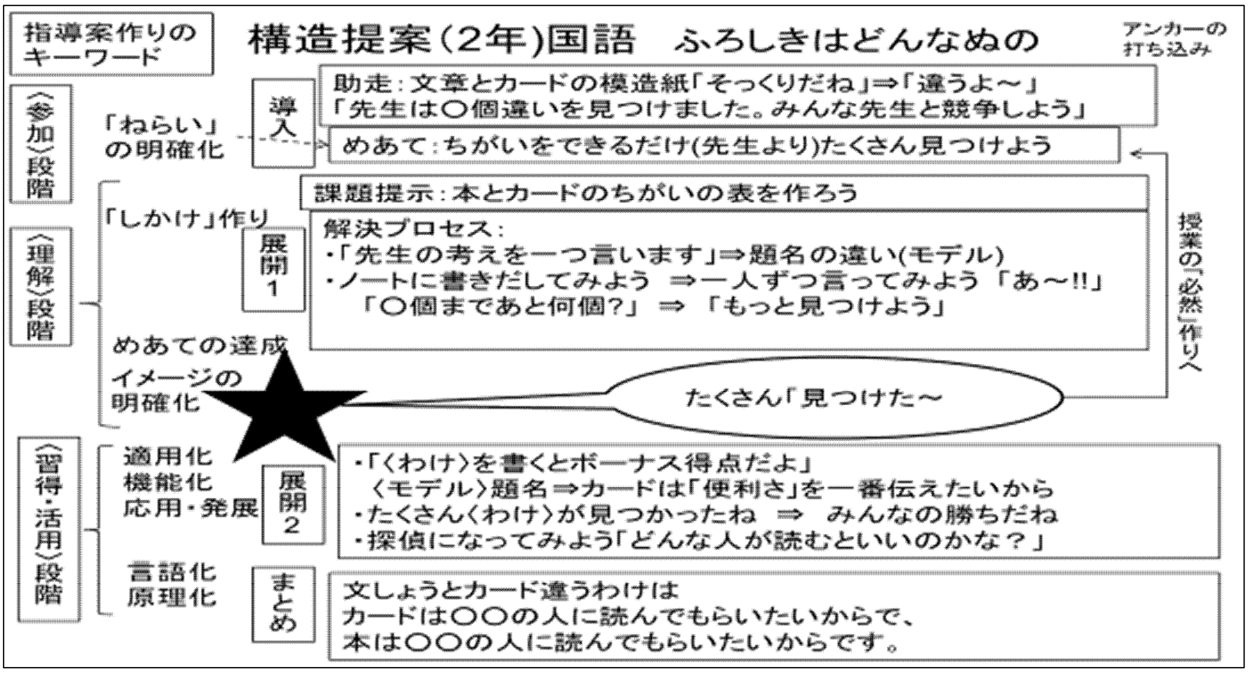
＜いいひがしプロジェクト研究会・八東地域教育研究会　合同研修会＞

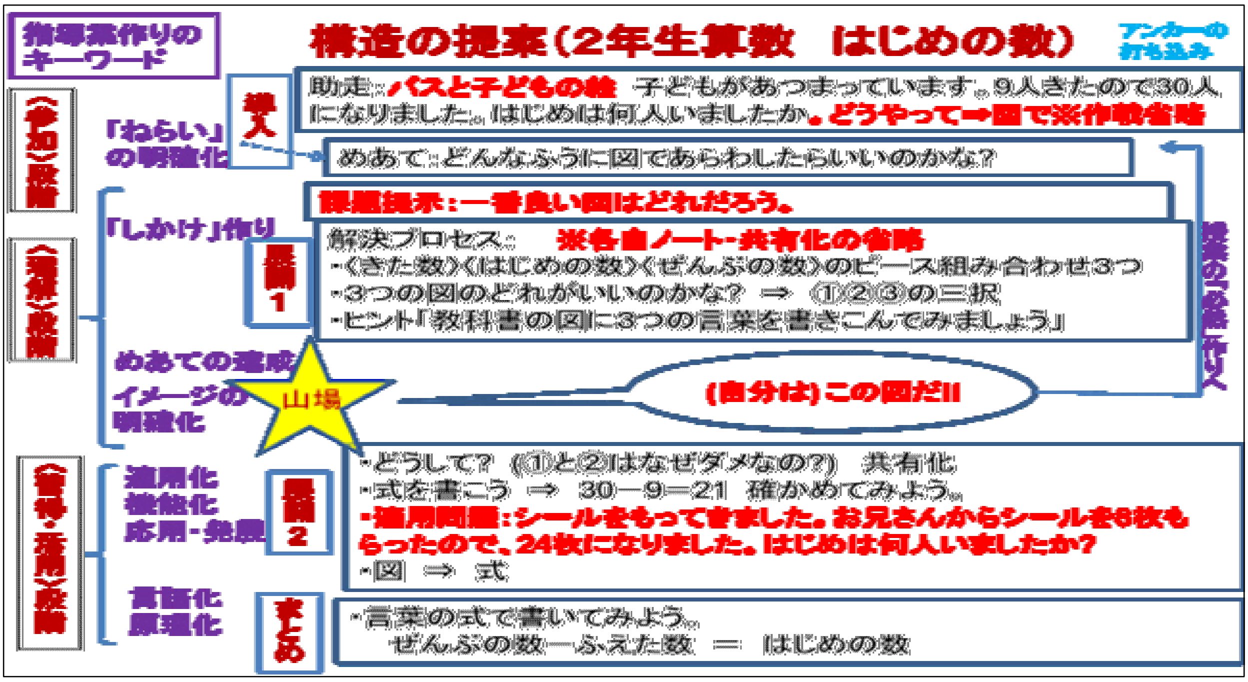
研修テーマ「つながり合い 学び合う 子どもたちの育成」

1　開 催 日 時　　平成２７年６月２３日（火）１０：３５～１６：４５
2　開 催 場 所　　八頭町立安部小学校，鳥取市立修立小学校
3　アドバイザー　　明星大学　小貫　悟　教授
4　公開授業に対するアドバイス（改善案の提示）

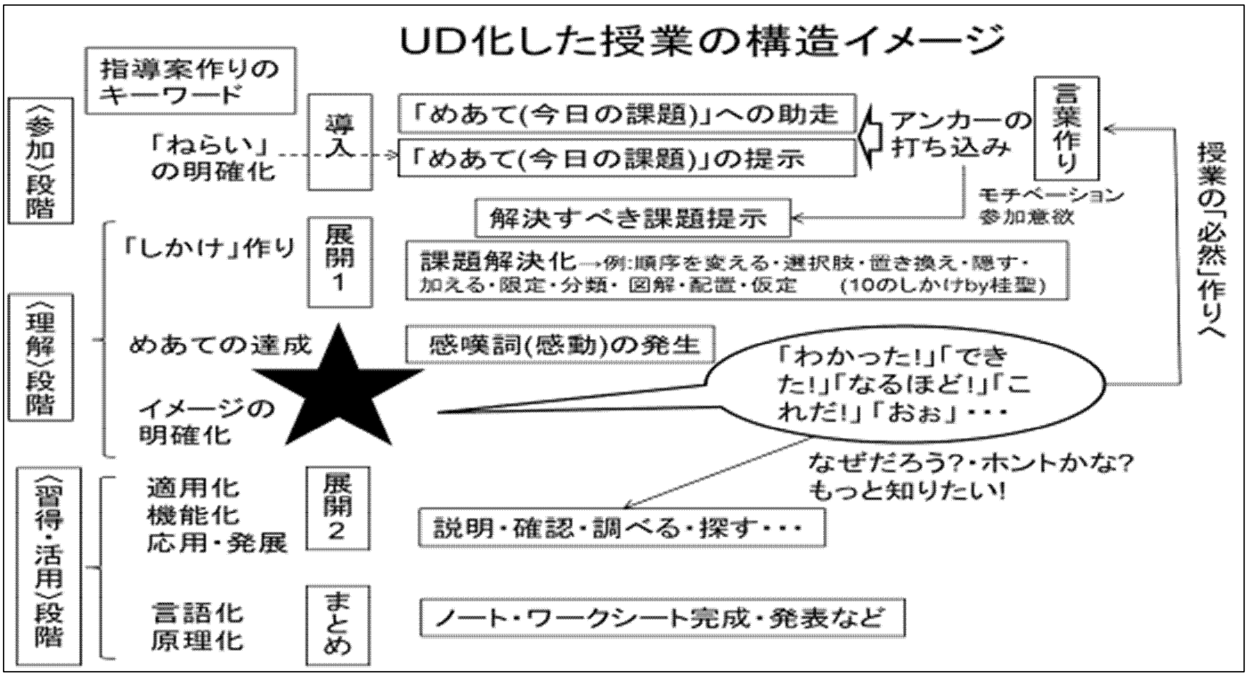
（１）安部小学校　２年国語「ふろしきはどんなぬの」



（２）修立小学校　２年算数「かくれた数はいくつ」



5　講義「授業のユニバーサルデザイン化を実現する」　　明星大学　小貫　悟　教授



（1）子どもが考え続けるサポートをすること

ＵＤ化の３つの視点を入れたらＵＤ授業になるとは限らない。視点を入れるのが目的になってはいけない。

（2）山場は「乗り越えた」「心が動いた」ときに起こる

きちんと考えられた展開であるにもかかわらず，なぜ山場にならないのか。それは全員が壁だと思っていることに取り組んでいないからである。また，授業をＵＤ化するにあたって，最大のテーマは「統合」である。バラバラの情報をいかに関連させるかがポイントである。

（3）山場までの時間は２０分

児童の集中力の持続を考えると，２０分が限界である。したがって，２０～２５分で授業をつくる。それ以上のばしても，できた児童にとっては無駄な時間，できない児童にとってはつらい時間になってしまう。

導入部分を除けば，山場まで１５分。制限を設けた方が展開を考えやすくなる。

（4）めあてとねらいは違う

ねらいは教師が授業全体を捉えてもつもの，めあては子どもの目印である。もっと焦点化すべきである。

例えば本時なら，「どんなふうに図で表したらいいのかな。」というように具体的でわかり易い方がよい。

（5）できる子が退屈になって我慢する授業はＵＤとはいえない

算数の授業であれば，図・式・ことばが関連して理解することになるが，図の３択で全員参加をさせ，ことばで説明する場でできる子どもの力を借りるというように，それぞれの活躍の場を設けていくとよい。

展開１で全員理解させようと思わないことも大切である。適用問題に進まないと，「わかった！試してみたい。」という児童はが満足できないし，わからなかった児童もそこでわかることもある。４５分終わったところで勝負だと思えばいい。いつまでも最初の問題を分からせようとする必要はない。

以上のように，小貫先生が全国の小中学校でたくさんの授業を参観された上で，研究者としての立場から提案された内容は，これまで自分たちが行ってきた授業展開とはかなり異なるものであった。子どもたちの集中力の持続時間という科学的根拠からくるアプローチには説得力があった。「山場を２０分」とする展開に挑戦していくことで，「できた・わかった」子どもたちを増やし，互いに学び合う授業の実現に迫ることができるという手応えを感じた有意義な研修会となった。